

第2回富山県婦人海外派遣団

西ドイツ・スイスに学びて

富山県農協婦人組織協議会

会長 竹部 喜代子

第2回富山県婦人海外派遣事業は、豊かな郷土を拓く婦人指導者の養成を目的とし、派遣先のドイツ連邦共和国・スイス連邦共和国での研修課題は、地域社会づくりと婦人の参画、消費活動の実態、自然保護の実際、家庭訪問、文化・福祉・教育などの施設の視察・見学等々と多岐に亙るものです。

派遣団は、役職員10名、団員27名で構成し、期間は、昨年9月4日大阪空港からハンブルグ空港を目ざして出発し、同月14日成田空港に帰国し、翌15日に帰富までの12日間でした。

短期間ではありましたが、今も研修地での交流・交歓・施設訪問や国々の政策など鮮かに脳裡に焼きついており、事前研修及び研修先々での講師の説明、又表敬訪問のヘッセン、及びスイス赤十字国際委員会では日本国の威厳があればこそとうかがえる対応を受けるなど、県事業ならではの内容であったことに起因するもので、この派遣事業への県当局の企画と関係市町村の御支援及び県民各位の深い御理解の賜と深く感謝申し上げます。

たまたまこの派遣団の団長を仰せつかり、責任の重大さに身を堅くいたしておりましたが、一行は誠に元気で旺盛な研修意慾に終始するなかで和気藹々の団気風を醸成し乍ら、揃って無事に帰国が出来ました。団員が心に受けとめたものを地域の中に投げかけ実らせるための努力をしている知らせを耳にするにつけ、大変嬉しく、皆様方の温いお見守りを祈って止まない次第です。

さて、出発前にヨーロッパの気候は内地の11月頃と聞いて行きましたが、研修地は30年

振りの暖秋ということで、寒がりの私には大変有難く快適に過ごしてまいりました。富山を出発し、西ドイツフランクフルト空港に降り立つまで約26時間、時差ボケの頭を振り振り研修は容赦なくスケジュールに沿って始められてゆきました。

ヘッセン州首相直轄婦人広報局長より就労婦人は37%であるが、この人達は子供が生まれると3才児までの教育を重視するので、出産就労婦人の49%まで家庭に入り育児に専念するとのことでした。子供の数は1.7人が平均で、「西ドイツでは青少年の犯罪の増加はみられない。今後麻薬を防ぐことが問題です」とのお話しに、日本と比べて羨しい限りでした。州では大臣1名、大学総長1名、局長クラス3名、一般では管理職に30名余の女性がついており、町会議員にも14%、州議員に8%位とのお話でした。

ホームヴィジットに入った家庭で、子供の躾について尋ねると「両親の生活そのものが手本になるので親は立派な姿でなくてはならない」と繰り返し強調され、感じのよい子供達の生活態度はこの御両親の敬虔な教育理念に育まれたものだとわかりました。テレビの子供番組も午後の6時～7時までで民放はないとのことでした。地下室には手づくりの瓶詰食品がぎっしり並べられ、買物は週1回が普通で、多くて2～3回。どの部屋を見ても合理的で無駄がなく、快適で清潔な暮らしを楽しんでいられました。言葉は通じなくとも、身体からにじみ出る真心は通じ合えた数時間でした。

フランクフルト主婦連盟の活動は、家事訓練、消費問題、環境問題等々と巾は広く、50余の各課の教室の中には家政学士の資格の取れるコース、語学コースなどもあり、対象の婦人はフランクフルト市内全婦人の誰もが学べるのが出来、開催案内も広告で知らせるとのことでした。多彩な活動をしているこの連盟の会員数は700名で、運営には7人の役員のうち交替で毎日2人が事務所に詰めてとりしきるといふ質の高い組織体でした。

スイスのロマンド消費者連合も又、1959年に設立し、1966年から月刊紙「よりよい消費として」の発行ほか、多くのパンフレットを発行し、公報活動を主軸とした消費者意識啓発運動を行い、そのひたむきな歩みには社会的信頼度も高く、業界で消費者協会の指導を乞うスーパーや商店が出るという躍進ぶりでした。

運営には常勤の3人の女性の手で、月に一度情報紙を出し、他に大人向け、子供向けのものや商品知識のパンフレットがいろいろつくられ配布されていました。この会には200名のボランティアが登録しており、この人達が月刊紙を街角に立って売り捌き、パンフレットも配布するというすばらしい組織でした。又月刊紙の売上収益を財源として運営費を賄うとのことでした。

両国の組織共、その社会貢献度は大きく、自主財政による運営が行われ、その活動は市民の信頼の厚いものでした。

社会福祉施設では、身体障害者に社会復帰のため技術を身につけさせるハイデルベルグ総合リハビリセンターは、1970年に開設され現在までに17,000人を新しい職場に送り出したとのことでした。入所対象年齢は18才～59才までで、盲人の訓練室ではコンピューター指導が行われており、ドイツの技術水準のしからしむるものと驚嘆しました。又州立マインツ小児神経学センターは、0才～16才までを入所対象とし、精薄や神経系統の病気や集中力のない子供の早期発見、早期治療を行

う施設で、1971年ドイツで2番目に開設され、併設の幼稚園もあり、障害児を入れて普通児との交流を図っており、スタッフ110人での詳細な診断が行われていました。団員が特に印象を深くしたことは、障害更生に努力する親子へのボランティア活動の活発だったことで、国にのみ依存する福祉でなく、健康な私達が社会全体に積極的に手を貸す時代という認識を改たにしたことでした。

ジュネーブ州立ラコムリハビリセンターは1981年に完成し、精神薄弱者の職業訓練・治療・教育の3つの分野で指導が行われ、入所者75名、通所者50名でした。どのように訓練しても社会復帰のできるのは20%～30%でそれも保護が必要とのことでありました。

このほか、西ドイツのウイスバーデンにあるランダーハウスシュレー（小学校）での授業見学、西ドイツの自然保護によるローテンブルグの歴史的建造物に目を見張り、ミュンヘン市では芸術の古都を守りながらの近代的で新しい街づくりの素晴らしさに感嘆してきました。スイスの自然保護は観光利用とたくみに調和させ、標高2,000m近くまでカウベルをつけた牛がのんびりと牧草を食み、スイス酪農を成立させ、農業所得は会社の工具並みになるよう仕組まれているなど均衡のある政策が行われていました。

食料問題では、ドイツは74%の自給、スイスは55%自給度をもつ国々でした。ドイツでは各家庭が1～2ヵ月分の食料の備蓄が常習であり、スイスでは国家の義務的備蓄は品目によって3ヵ月～17ヵ月までとそれぞれきめられ、家庭備蓄は2ヵ月分、国境を境に四面外国に囲まれた両国の怠りない日常防備には深く教えられるものがありました。国民合意で国内自給率100%を目ざして農業振興政策が進められているということを引き、日本では33%という低い自給率であり乍ら、輸入依存論を出してはばからない様相を思い、やる方ないものを覚えました。

両国の旅で印象的なことは、古い建造物を大切に残し調和のとれた街づくりがされていたことや、広告やチラシは掲示板にのみ貼られてあるためどこをみてもすっきりしており、路上には煙草の吸殻1つ落ちていない綺麗な環境が保たれていたことです。家々の窓辺やテラスにはペコニア・ゼラニューム・マリーゴールド等々の色とりどりの花が咲きこぼれ、街のあちこちには花壇がつくられ、樹木の緑に映え、その美しいたたずまいに、私達一行、心和む日々を重ねることができました。

スイスでは条例により夏の期間は必ず窓辺

に花を咲かせることが義務づけられているとか。しかし、住む人々の育てる心があってこそ実現出来るもので、国民総参加の実践にしみじみ民族の温さと優しさを感じてきました。

こうした印象を報告したことが今回の大会のスローガン“生活の在り方を見直し、きれいな環境づくりにつとめましょう”を生みました。富山県では21世紀への挑戦の1つに「日本一の花と緑の県」づくりの言葉があります。

皆様、家の外にむけて道ゆく人々に憩いの言葉をかける花一杯を、植える努力をしようではありませんか。